

【特集】 第4回IWAアジア太平洋地域会議の参加報告

タバ パッタ, 中園 隼人
(Japan-YWP広報委員 株式会社 東京設計事務所)



2011年10月2～6日に、東京国際フォーラムにて、第4回IWAアジア太平洋地域会議が開催されました。この会議は、IWAのアジア太平洋地域における上下水道及び水環境に関する会議として、2年に一度開催されている国際会議であり、第1回(2005年)シンガポール、第2回(2007年)パース、第3回(2009年)台北で開催されており、今回の会議では22トピック103セッション約700編もの発表があり、盛況な国際会議でした。

10月2日にはJapan-YWP主催のIWA若手水専門家プログラムワークショップが開催され、IWA会長のGlen Daigger氏からの“The Top 10 Trends Transforming the Global Water World”は、若手水専門家の“EYE-OPENER”となる熱いメッセージを頂きました。また、アジア太平洋地域各国からのCareer Compassでのディスカッションでは、それぞれの労働時間にまで話が及び、楽しくも貴重な内容でした。また、コーヒーブレイクの時間も十分に設定され、加えて、Japan-

YWP主催者の配慮もあり、多くの若手水専門家と意見交流が持つことが出来、大変有意義な時を過ごすことが出来ました。3日午前の開会式・基調講演後、5日迄会場で分科会、ポスターセッション、ワークショップ、展示会が行われました(6日は技術視察)。タバと中園は上水道関連の分科会を聴講し、水源水質に基づいた浄水プロセスの選定方法、緩速ろ過の連続使用、スリランカのBOPビジネス等、多くの知見を得ることが出来ました。

また、タバは「東ティモールの水道施設整備」について、中園は「経済的側面からみた施設統廃合の有効性とその影響要因」について発表し、中園の発表内容は施設統廃合という成熟社会の問題であるため、豪州や日本の先進国の方々から質問を頂き、有意義な議論を持つことが出来ました。

原 宏江(北海道大学工学研究院 水質変換工学研究室 博士課程2年)

10月2日、秋空の東京で幕を開けた第4回IWAアジア太平洋地域会議(4th IWA-ASPIRE)は、「持続可能な水供給・循環システムの実現を目指して」をテーマに掲げ、分科会・ポスターセッション、ワークショップ、展示会、テクニカルツアー等盛りだくさんの内容で、5日間にわたって多数の発表と活発な議論が繰り広げられました。

私は今回、国際学会で初めて口頭発表の機会をいただき、「トキシコゲノミクスのアプローチを用いたヒ素毒性の評価」について発表しました。トキシコゲノミクスとは、化学物質を動物や細胞に暴露し、その際の遺伝子応答に基づいて、毒性発現メカニズムの解明や毒性予測を行う学問領域です。早くから医薬分野への利用がさかんに研究されてきましたが、私の所属する北海道大学水質変換工学研究室においても、2000年代の中頃から本手法を取り入れ、トキシコゲノミクスのアプローチによるヒ素や重金属、新規ナノ材料等の毒性評価を試みてきました。現在は、下水再生水の品質評価への利用にも取り組んでいます。4th ASPIREにおいては少し毛色の違った発表となりました。



だが、アジア諸国におけるヒ素汚染への関心の高さから、貴重なご質問・ご指摘を多くいただきました。

最後に、どうしても触れておきたい嬉しいニュース。最終日の閉会式において、同じ研究室の東條一樹君(修士2年)が、日本人で唯一の“Best Student Award”に輝きました！身近な人物の大活躍に、「私も負けてられないぞ」と気持ちを新たにするフィナーレでした。今後の研究生活にとって有益な知見と良い刺激が得られた学会参加となりました。



にぎわうポスター会場

東條君(中央)、受賞後の笑顔
岡部聡先生(左)、佐野大輔先生(右)と

目次:

【特集】第4回IWAアジア太平洋地域会議の参加報告	
(タバ パッタ, 中園 隼人)	1
(原 宏江)	1
【近況報告】	
海外出張 ～クウェート国～	2
(小池 浩哲)	
学会報告 ～IWAの水環境健康関連微生物シンポジウム@ニュージーランド～	3
(端 昭彦)	
【Japan-YWPイベント報告】	
第1回Japan-YWPイブニングセミナーの報告	4
(笹原 俊一)	
第1回Japan-YWP夏期セミナーの報告 (東日本大震災における水の課題と対応)	4
(二宗 史憲, 岸田 直裕)	
第3回IWA若手水専門家プログラム ワークショップの報告	5
(吉田 征史)	
【私の1日のスケジュール】	5
(執行 真未)	
【Water Resources】	6
“みず”に関するお薦めの情報	
(山田 真義)	
(山本 敦史)	
(岡本 真由子)	
【手紙 ～拝啓若手の君へ～】	7
自分が変えるという意識を持つ	
(増子 敦)	
今後の予定 (YWP活動予定, 他イベント情報)	7
入会方法と問い合わせ先	7
編集後記	7

【近況報告】

海外出張～クウェート国～

小池 浩哲(株式会社 NJSコンサルタンツ)



写真1: 逆三角錐の配水高架水槽



写真2: 道路直裁の人口散水配管



写真3: ホテルから見たクウェート市内



写真4: 薬品貯蔵室

2011年4月からイラク共和国の第二の都市であるバスラ市の浄水場設計業務に携わっています。施主との設計協議は、我々技術者の安全面の理由により、隣国のクウェート国、あるいはその他の中東諸国で行っています。以下に、クウェート国に2ヶ月間出張したときに見学した水道施設について紹介します。

日本から空路でアラブ首長国連邦(UAE)を経由してクウェート国に入りました。機内から地上を俯瞰したときは、連綿たる砂漠でしたが、クウェート市内に降り立れば、ループ状になっている高速道路が何本もあり、道路舗装も日本以上に平坦で走りやすく、さらにその両側の植栽も人工的散水で青々と茂っています。市街地には高層ビルが建ち並び、とても中学生の頃、ニュースで見ていた、国破れて山河あり、のような情景ではありませんでした。

※写真1: 逆三角錐の配水高架水槽

※写真2: 道路植栽の人口散水配管

※写真3: ホテルから見たクウェート市内

上司の計らいでクウェート国の水道施設(Mina Abdullah Reservoirs Complex)を見学する機会を頂きました。海岸沿いに立地している火力発電所のすぐそばに蒸留式海水淡水化設備があり、そこで淡水化された水は、DCIPφ1200mm×4条でMina Abdullah Reservoirs Complexに圧送され、そこでミネラル分を含む井戸水とブレンドし(約10:1)、塩素注入された後、ポンプにより各地に送配水されます。

配水池は地下式の鉄筋コンクリート構造で、長220m×幅220m×有効高5.2m×5池(合計約125万 m^3)という日本国内ではなかなか見ることの無いジャンボ・サイズです。その巨体に圧倒されつつも、築造時にどのような温度ひび割れ対策を施したのか、維持管理上の難点はないのか、いろいろと思索してしまいました。

ポンプ棟や薬室等も見学しましたが、日本ではほとんど使われなくなった液体塩素注入設備を見て、興

味を持ちました。液体塩素(写真4)は金属容器に密封され、貯蔵室に横置きされています。1本だけ計量器の上に乗せられ、減少した重量が使用量になるという単純明快なシステムを採用しています。日本の水道施設では、比較的取り扱いが容易で、安全性の高い次亜塩素酸ナトリウムが多用されていますので、薬品貯蔵室には防液堤が設置されています。しかし、周りが無人の砂漠になっているMina Abdullah Reservoirs Complexの場合、防液堤を設けず、対症療法的に換気ダクトを多く配置しています。

製造工業が発達していないクウェート国では、食品、生活用品から工業製品まで、その多くを輸入に頼っています。こういう背景もあって、水処理の各プロセスで使われるポンプや計器類は常時、すぐに使える予備システムが必ず設けられているところが非常に印象深く、勉強になりました。

日本に帰国する直前の2週間は、気温が急に上昇し、ついにCNNの天気予報に我が目を疑ってしまうような気温が出ました。摂氏53度!もう修行であると割り切るしかありませんでした。

2ヶ月間のクウェート出張は、日本国内では想像できない設計思想に触れることができたり、欧米技術者が設計した施設を見たりして、水道人として非常に有意義な経験をられました。また、旅行でなかなか足を踏み入れることの少ない中東での滞在は、イスラム文化についての見聞を広げることができ、大変貴重な体験になりました。今後、得られた知見及びその地の事情に適応した設計思想を業務に生かしていき、施主に満足して頂ける成果を提供していく考えです。



写真5: 中東料理の一例

【近況報告】

学会報告～IWAの水環境健康関連微生物シンポジウム@ニュージーランド～
端 昭彦(東京大学大学院 工学系研究科)

会議の様子

2011年9月18日より同23日までニュージーランドのロトルアで開催された16th International Symposium on Health-Related Water Microbiologyに参加しましたので、その内容を紹介させていただきます。

会場となったロトルアは、地熱活動が活発な地域で、街中から硫黄の臭いが立ち込めているほか、至る所から煙が噴き出していました。温泉も湧いており、会場直近のスパには、私たちを含め多くの参加者が足を運んだようです。会期が地元開催となったラグビーワールドカップと重なっていたためか、街中でラグビーボールを持ち歩いている方々を良く見かけました。また、夜になると試合の中継をしているバーに多くの人が集まり、大変な盛り上がりを見せていました。



Grabow Awardの表彰も行われました。

本学会は、水中の健康関連微生物(病原微生物及び指標微生物)を対象とした国際学会です。私は水からのウイルス検出法に関する成果についてポスターで発表しました。ポスター会場がランチや軽食会場を兼ねていたうえ、ポスターセッション後、会期終了までポスターが掲示されていたため、思っていたよりも多くの方と議論を交わすことができました。また、the 15th International Conference of the IWA Diffuse Pollutionも同じ会場で開催されており、そちらのポスターも気軽に見に行くことができたので、とても充実した時間が過ごせました。



街の様子。交差点は余りなく、代わりにロータリーが。



間欠泉の様子

発表の内容は、病原微生物検出や除去・不活化、リスク評価、指標微生物の有効性評価、マイクロバイアルソーストラッキングなど多岐にわたりました。中でも特徴的だったのは、Extreme Event Workshopではないでしょうか。当セッションでは近年頻発している大規模な自然災害が水環境に与えた影響や、災害対策に関する発表が行われました。日本では3.11の震災やそれに続く津波災害に関する演題が出たほか、

クライストチャーチでの震災、ハリケーンカトリナ等が話題となりました。また、セッション後にはこれら大規模災害に対して我々健康関連微生物分野が果たすべき役割について議論しました。

その他の発表について、カンピロバクターやクリプトスポリジウム等に由来する人畜共通感染症に関する演題が多勢を占めていました。これら微生物に対しては、ヒト由来よりもむしろウシや家禽類などの動物由来の糞便汚染に特に注目するのが現在のトレンドとなっているようです。これに関連し、従来用いられてきた大腸菌や腸球菌などの指標微生物の有効性再評価、バクテロイデス属菌など、各動物種に特異的な微生物に関する発表が多く見られました。しかしながら、最適な指標微生物を見極める上での決定打は未だ出ていないのが現状であるようです。私のメインの研究テーマであるウイルスについては、培養困難であるとされているノロウイルスやアデノウイルスの培養法に関する演題がいくつか出ており、非常に興味深かったです。ウイルスに対しても有効な汚染指標が見つかっていないのですが、これに関してはアデノウイルス、ポリオーマウイルスに多くの研究者が注目していました。

本学会では世界の研究者が抱える問題意識や先進的な成果に直に触れることができ、非常に貴重な体験となりました。今後研究を進める上でのヒントも得られたので、大満足です。国際学会と聞くと、国内学会と比べ敷居が高いように感じられますが、研究のモチベーションに繋がるのは確かなので、臆せず積極的に参加すべきだと実感しました。それでは！



ポスター会場の様子

【Japan-YWPイベント報告】

第1回Japan-YWPイブニングセミナーの報告

2011年7月22日に、東京大学本郷キャンパスにてJapan-YWPイブニングセミナーが開催されました。研究機関、事業体、民間企業など各方面から約30名が参加しました。セミナーは、寺田戦略委員の司会の元、春日代表の開催挨拶、参加者全員による自己紹介に続き、3名のYWP会員がそれぞれの経歴・職場環境についてプレゼンを行いました。

東京大学大学院の黒田啓介氏は、「日欧の研究環境の違い—Eawagでの在外研究を経験して—」と題し、1年間のスイス在外研究を中心にご自身の研究生活について総括されました。スイスの研究環境の特徴として、豊富な予算、多様な人材・雇用形態、他機関との密な連携、研究開発への理解等を挙げ、日本が参考とすべき点は多いと言及されました。また、生活環境について、物価は高いものの(食堂の昼食が約1,000円)、博士学生は有給であるため、不便さは感じなかったそうです。

次に、双日総合研究所の岩波美智子氏は、「ジャカルタ水道コンセッション契約評価@イギリス・バーミンガム大学」と題し、ご自身の英国留学経験と学位論文のテーマである水インフラマネジメントについて紹介頂きました。ジャカルタでは、無収水率を改善するために給水量を減らす等、契約会社による

笹原 俊一(日本水道協会)



住民本位といえない行動がみられるそうです。定量指標のみならず定性情報も加味した評価基準の必要性を提言されておりました。

最後に、東京都水道局の木下智之氏は、「私の経歴と東村山浄水場の歴史及び現在の運用」と題し、民間企業と都水という二つの職場での経験を紹介されました。木下氏は、民間企業で培った「消費者への奉仕精神」や「真理・英知の追求」といった行動理念を都水においても念頭に置いているそうです。また、都水の一致団結力や現場力を積極評価する一方で、専門家はどう育成していくかが今後の課題であると言及されました。

今回の発表者3名は、常に自らの関心テーマ・課題解決に向けて積極的に挑戦をされており、その意欲的な姿勢に大変刺激を受けました。イブニングセミナー及び懇親会に参加して、同じ水分野でありながら普段顔を合わせることの少ない若手同士がより気軽に交流出来るまたとない場であると感じました。このような交流の機会を与えていただいたYWP委員各位に改めて感謝申し上げます。

第1回Japan-YWP夏期セミナーの報告(東日本大震災における水の課題と対応)

二宗 史憲(Japan-YWP戦略委員 社団法人日本水道協会)
岸田 直裕(Japan-YWP戦略委員 国立保健医療科学院)

東日本大震災の発生から約半年が経った2011年9月3日に、東京大学本郷キャンパスにて『東日本大震災における水の課題と対応』をテーマに夏季セミナーを開催しました。本セミナーは、若手の立場から東日本大震災を振り返り、現在、さらに将来起こりうる震災に対する水の課題と対応について認識を深めることを主旨として開催されたものです。

開催当日は、産官学からのバランスのとれたYWPの会員構成を踏まえ、各分野の専門家よりそれぞれ8題の講演を行い、総勢約50名が参加する盛況なセミナーとなりました。なお、講演者と発表内容は次のとおりでした。

- ① 遠藤 智義(高松市上下水道局)「被災地における応急給水活動の報告」
- ② 林田 武志(千葉県水道局)「東日本大震災に伴う液状化による水道施設への被害と対応」
- ③ 二宗 史憲(日本水道協会, Japan-YWP戦略委員)「東日本大震災における水道の応急給水・応急復旧活動」
- ④ 諏訪 守(土木研究所)「被災した下水処理場における放流水の衛生学的安全性の確保」
- ⑤ 田名部 直勝(前澤工業株式会社)「民間事業者における震災への対応と取り組み」

- ⑥ 真砂 佳史(東北大学, Japan-YWP 総務委員)「東日本大震災を経験して-大学の被災・復旧状況-」
- ⑦ 高橋 千里(合同会社スマートウォーター)「原子力施設の事故が水道に影響するメカニズムの概観」
- ⑧ 池本 忠弘(厚生労働省健康局水道課)「水道水の放射性物質汚染に対する行政対応」

当日は大いに議論が盛り上がり、終了予定時刻を約1時間オーバーしての終了となりました。また、セミナーの場では議論が尽くされず、終了後の意見交換会にも多くのメンバーが出席し、引き続き、熱い議論が交わされました。今後も、YWPでは、東日本大震災をテーマとしたセミナー等を継続的に開催していくとともに、微力ながらも自分たちのできることから地道に支援活動を行っていきたく考えております。



第3回IWA若手水専門家プログラムワークショップの報告

吉田 征史(Japan-YWP広報委員 日本大学)



ウェルカムスピーチ(竹村氏)



基調講演(Glen Daigger氏)



会場の様子

平成23年10月2日に、東京国際フォーラムにて第3回IWA若手水専門家プログラムワークショップが開催されました。本ワークショップは2日～6日にかけて開催された4th IWA-ASPIREにおける若手の会として位置付けられたもので、国際的な若手のネットワーキング、諸先輩方から若手へのキャリアアップ指南を趣旨としております。これまでの他国での開催においては50名程度の参加者でありましたが、今回は170名を超える参加者があり、大盛況であったと思われま

す。Japan-YWP代表の春日郁朗氏の開会挨拶及びYWPの説明、IWAアジア環太平洋支部のRyan Yuen氏、及び本ワークショップスポンサーである(株)日水コンの竹村雅之氏によるウェルカムスピーチがあり、その後、IWA会長のGlen Daigger氏による基調講演がありました。ウェルカムスピーチでは参加者への御礼とJapan-YWPへの激励のメッセージを頂きました。基調講演では、日本を含む東南アジアの人口減少・増加問題と水資源の枯渇、排水の回収・再生利用の重要性などをご講演頂き、また、若手に対し、学会参加によって研究内容を聞くこと以外にも人と巡りあう機会として積極的に参加することの意義などのメッセージを頂きました。午前の第2部では、国立シンガポール大学のYang Xu氏、成功大学(台湾)の

Langmuir Whang氏、国立環境研究所(日本)の小野寺崇氏、IWA中国支部のTao Li氏から、各国の水に関するホットピックの紹介があり、地域特性による課題の提起とその対策・対応が整理されました。午後はCareer Compassと題し、BMT WBM(豪州)のReid Butler氏、(株)日水コンの松原康一氏、東京都水道局の米田優宇氏、同済大学(中国)のXiahong Guan氏、PUB(シンガポール)のWong Xin Wei氏からそれぞれ企業、事業体、大学・研究機関における自身の活動内容および、各機関に属する若手のキャリアアップに何が重要であるかのアドバイスを頂きました。

どのセッションにおいても、若手ならではの忌憚のない質疑が行なわれ、また、コーヒープレイクの時間やワークショップ終了後にも参加者同士の意見交換が続いておりました。

末筆ながら、本ワークショップを開催するにあたり多大なるご支援をいただいた、メインスポンサーの(株)日水コン、およびIWA日本国内委員会、東京都水道局・下水道局に謝意を表します。

【私の1日のスケジュール】

【自己紹介】

福島工業高等専門学校を卒業後、平成21年度に入社。高専では、下水道分野を専攻していましたが、現在は上水道の分野で仕事をしています。

私が所属する部署では、主に国内の上水道事業のコンサルティング業務を行っており、上水道施設の改良や更新、送配水施設の整備、水道ビジョン・ガイドラインの作成など、上水道事業の様々な分野を専門としています。それ故、似たような案件はあっても、全く同じ内容の案件はないため、未だに分らない事が多い仕事ですが、先輩社員の方々に教わりながら日々業務に奮闘しています。

【1日の流れ】

9:30 出社：メールのチェックや担当している案件の進捗状況を確認し、当日の作業内容を組む。(出張する事も多い仕事ですが、基本はデスクワークです。)



執行 真未(株式会社 日水コン)



12:30 昼食：お弁当または近場の飲食店で昼食をとります。

13:30 業務開始：午前を引き続き、業務に取り組みます。

15時にはおやつタイムを取って小休憩。出張などのお土産を頂くことが多いので、全国各地の銘菓を食べることができます！

17:30～ 退社・帰宅：当日の作業が終わり次第、帰宅します。月に数回は、会社の同僚と食事もします。

24:00 就寝

【所感】

精神・体力的に厳しい面もあるコンサルティング業務ですが、事業活動を通じて社会貢献ができることが、この業界の魅力ではないかと感じています。



日水コン本社



オフィス内

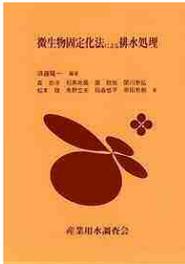


Young Water Professionals

【Water Resources】“みず”に関するお薦めの情報

「微生物固定化法による排水処理」のご紹介

山田 真義(鹿児島工業高等専門学校)

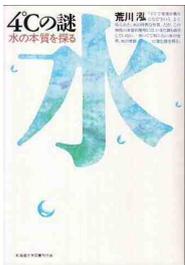


初版発行が1988年と今から二十数年前の書籍ですが、高専の研究指導において役立っている本を紹介したいと思います。その本は「微生物固定化法による排水処理」(須藤隆一編著)です。この本は従来から生物膜法とよばれていた散水ろ床法や回転円板法をはじめ、排水処理に用いられている好気性と嫌気性の微生物固定化法について記述している書籍です。本書は、微生物固定化法の原理と特徴(1章)、回転円板法(2章)、嫌気性固定床(3章)、生物ろ過法(4章)、土壌処理法(5章)、包括固定化法(6章)、スラッジブランケット(UASB)法(7章)から構成されています。研究活

動に入る前(研究論文を読む前)の学生に微生物固定化法とは? UASB法とは?という基礎的なことを指導する上で非常に役立っている書籍です。また、3章から7章の各章末に各処理法の今後の課題と展望が記述されており、現在の動向と照らし合わせると実に興味深いです。それと“みず”からかけ離れてしまいますが、「理系のための研究生活ガイド」(坪田一男著)というブルーバックから出版されている本があります。研究が楽しくなる、自分が元気になる本だと思いますので是非読んでみてはいかがでしょうか?

「4°Cの謎 水の本質を探る」のご紹介

山本 敦史(Japan-YWP広報委員 大阪市立環境科学研究所)



私がお紹介するのは、91年の書籍になりますが「4°Cの謎 水の本質を探る」(荒川泓著)です。地球上に最も多量に存在し、人体の約2/3を占める液体である水は、他の液体には見られない液体としての特異な性質を持っています。この書籍の中では、溶液物性論を主題に水の様々な性質について数式の導出ではなく、直感的描像による解説がされています。私は現在、化学分析による水質検査を主な業務にしていますが、学生時代は水溶液中の低分子の相互作用による会合体形成や自己組織化についての研究を

行っていました。溶液化学について基礎的な勉強はしているつもりでしたが、水溶液において水分子がどのように存在しているのかについて直感的にイメージすることができ、密度だけでなく、比熱や電気的性質、液体構造についてなぜそのような性質を示すのかについて再認識することができました。生命の営みの媒体としてだけでなく、地球の約七割を覆う液体もやはり水でなくてはならなかったと改めて感じさせられました。

「カラー図説・排水処理の生物相談」のご紹介

岡本 真由子(株式会社 西原環境)



様々な分野の方々に対してお薦めできる情報、と記憶を巡らせ、今回、「カラー図説・排水処理の生物相談」(株式会社西原環境テクノロジー(現:株式会社西原環境)著/産業用水調査会)をご紹介します。本書は私の勤務先が著者であり、手前味噌な選択となってしまいましたが、その点はどうかご容赦ください。

生物相診断とは、顕微鏡観察により、ばっ気槽内の活性汚泥の微生物の種類と量を特定し、排水処理の状態を判定することです。

処理状態に問題がある場合などには、その原因を探る手掛かりとなり、処理の改善などに役立ちます。

本書には、活性汚泥の観察方法、約50種類もの微生物のカラー写真とイラスト、特徴的な形態などが排水処理の状態ごとに分かり易く示されています。排水処理の水質管理担当者のような生物相診断を必要とする方には、良きマニュアルとなるのはもちろん、普段、排水処理とは無縁の方でも、興味ある一冊になると思います。

【手紙 ～拝啓若手の君へ～】

自分が変えるという意識を持つ

増子 敦(東京都公営企業管理者 水道局長)



<ご略歴>

1978年 東京都水道局入局
 1987年 通商産業省工業用水課
 1989年 水道局経営計画部計画課
 1991年 東京都建設局道路管理部
 1992年 港区土木部工事課長
 1996年 水道局施設計画課長など
 2004年 朝霞浄水管理事務所長
 2006年 給水部長
 2008年 浄水部長
 2009年 多摩水道改革推進本部長
 2011年 公営企業管理者・水道局長

自分が変えるという意識を若いうちに持つというお話をします。自分がやらなければ誰がやるのかという強い意志です。

それには外からの刺激が必要です。自分だけで考えているのは問題点や解決策も数や深さに限りがあります。その意味で私がありがたく思っているのは、30代の半ばを過ぎた頃、上司からのお誘いで「水道と地球環境を考える研究会」という会に参加できたことです。この会には、大学や行政機関、水道事業者、民間企業の若手の職員が月一回ほど集まり、そこでの議論を元に最終的には「地球環境時代の水道」という本を出版しました。そこで、私は数多くの水道関係者の中での東京水道の立ち位置、求められる期待や役割を実感しました。水道を動かしているのは事業者だけでなく、水道関係者の大きな広がり支えていることも教えられ、また刺激も受けました。この会に限らず、外界の方と議論を深めていくと、普段当

然と思っていることも根本から考え直すこととなります。外からの刺激がエネルギーにつながります。

強い意志を持ち続けるためにもう一つ重要なことは、最終の目標を常に意識することです。水道では、安全でおいしい水を安定的に供給することによって、お客様に喜んでいただくことが最終の目標です。どんな困難があっても、一時は脇道にそれたとしても、喜ばれる水道の実現を目指して目的本意の行動をとり続けることが大切です。それが心の安定につながり、力強い意志の継続につながります。

世の中は数多くの人間で支えています。一握りの人間が果たす役割が大きいのもまた事実です。現役の人生は意外と短いものです。若いうちから自分が正しいと思うことをとことん追求し、社会に大いに貢献されることを期待します。

今後の予定(YWP活動予定, 他イベント情報)

(1) 第2回総会兼セミナー

2011年12月17日(土)13時30分より日本水道協会にて第2回Japan-YWPの総会兼セミナーを開催致します。詳細が決定次第メーリングリストでお知らせ致します。

主催: Japan-YWP 日程: 2012年12月17日13:30~18:00
 場所: 日本水道協会 7階 第1-3会議室 使用言語: 日本語

(2) 第4回IWAアジア太平洋地域YWP会議(4th IWA-Asia-Pacific YWP Conference)

2012年12月1~3日に東京にて第4回IWAアジア太平洋地域YWP会議を開催致します。詳細が決定次第ホームページやニュースレター、メーリングリストでお知らせ致します。

主催: Japan-YWP, IWA 日程: 2012年11月or12月(予定)
 場所: 東京(お台場 日本科学未来館を予定) 使用言語: 英語

入会方法と問い合わせ先

■入会方法

会員要件は、研究機関、自治体、企業等に所属する水関連の若手・学生とします。IWA-YWPの規定では原則35歳以下となっていますが、Japan-YWPでは35歳以上でも入会可能です。IWA会員であることの有無は問いません。また、年会費等は不要です。活動に興味のある方は奮ってご参加ください。入会希望の方は、1)所属、2)氏名、3)生年月日、4)E-mailアドレス、5)専

門分野を明記の上、右記までお申し込みください。

宛先 jpanywp@gmail.com (担当:真砂佳史, 真名垣聡)

■お問合せ

春日郁朗助教(代表, 東京大学大学院) kasuga@env.t.u-tokyo.ac.jp

佐藤久准教授(副代表, 北海道大学大学院) satoh@eng.hokudai.ac.jp

編集後記

今号は特集記事として第4回IWAアジア太平洋地域会議の参加報告を掲載させて頂きました。10月2日には同会議開催に併せて、Japan-YWP主催のIWA若手水専門家プログラムワークショップを開催致しました。Japan-YWPでは、今後もこのような国際会議の他に、国際的な活動をし

ている会員からの情報提供、勉強会・ネットワーキングを趣旨とした種々のセミナーを開催して参りますので、是非ご参加ください。最後に、今号を編集するにあたり、お忙しい中原稿をお寄せいただきました皆様、ご協力頂き、誠にありがとうございました。(Japan-YWP広報委員)

Japan National Young Water Professionals Newsletter Vol.3

発行 : 2011年11月30日

発行者 : Japan National Young Water Professionals(代表 春日郁朗)

編集 : Japan National Young Water Professionals広報委員

ホームページ : <http://www.iwa-jnc.jp/ywp.html>

Young Water Professionals